Research Monograph Series

生成的コギト
「現実を感じる、即ち、我生成す」
——自己根拠、世界性、作品性、言語デリバティブ、即、位相ロックの相互関係

The Generative Cogito “I Feel Reality; That Is, I Become”: Self-Ground, Worldness, Workhood, Language Derivatives, Soku, and Topological Lock

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Cogito “I Feel Reality; That Is, I Become”:
Self-Ground, Worldness, Workhood, Language Derivatives, Soku, and Topological
LockResearch Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」に対し、生成の位相存在論の立場から「現実を感じる、即ち、我生成す」という生成的コギトを提示する。ここで重要なのは、自己、世界、作品、言語を同一の概念として扱わず、それぞれの生成条件と機能を区別することである。

自己根拠とは、自己が自己を論理的に証明することではなく、自己の感じと現実感との接続から、自己が自己として局所的に生成する出来事である。世界性とは、特定の世界観ではなく、複数の世界観を生成し、それらを世界そのものと混同せずに観るための開放性である。作品性とは、特定の作品観や制度的定義に還元される以前に、事物、行為、生活、場所、関係が作品として生成し続ける開放性である。言語デリバティブとは、局所的な根拠から派生し、意味、価値、制度、未来可能性を増幅する言語構造である。

これらを接続する契機が「即」である。「即」は、自己の感じと現実感、世界と世界観、作品と作品観など、異なるものが差異を保ったまま直接接続し、その接続から新たな位相が生成することを示す。これに対して位相ロックとは、ある局所的な根拠とそこから派生した配置が唯一の必然的構造として固定され、派生物が根拠そのものに転倒する状態である。

関係を簡潔に示せば、次のようになる。

> 自己の感じ × 現実感 ——即——> 自己根拠
> 世界 × 世界観 ——開放性——> 世界性
> 作品 × 作品観 ——開放性——> 作品性
> 局所的根拠 ——派生・増幅——> 言語デリバティブ
> 派生物の根拠化・固定化 ——> 位相ロック

本論文は、芸術を、固定された自己像、世界観、作品観を揺らし、自己と現実との接続を再生成するインターフェイスとして位置づける。生成的コギトは、存在を確実性によって固定する命題ではなく、自己が共存在する現実との関係において、その都度生成することを自覚するための命題である。

キーワード

生成的コギト、生成の位相存在論、自己根拠、世界性、作品性、言語デリバティブ、即、位相ロック、共存在

目次

Contents

1. はじめに 1
2. 概念の全体構造.....2
3. 方法論と理論的位置 4
4. コギトの限界と自己以前性.....5
5. 自己根拠 6
6. 「即」と生成的コギト 7
7. 世界性 9
8. 作品性 10
9. 自己根拠、世界性、作品性の同型構造 11
10. 言語デリバティブ.....12
11. 位相ロック 14
12. 共存在から単一の根拠へ 16
13. 生成的コギトと自己証明 17
14. 芸術と生成的コギト.....18
15. 考察.....19
16. 結論.....20
参考文献 21
方法論的声明.....22

1. はじめに

近代哲学において、デカルトのコギトは、あらゆる対象への疑いを経てもなお残る思考作用を、自己存在の確実な根拠として提示した。「我思う、ゆえに我あり」という命題は、自己の存在を外部世界、伝統、権威から切り離し、思考する主体の自己確実性に基礎づけた。

しかし、この確実性は、すでに思考している主体を出発点とする。そこでは、その主体が身体、他者、環境、言語、時間との関係からいかに生成したのかが十分に問われない。生成の位相存在論において、自己は完成した主体ではなく、自己と自己以外との接続によって局所的に成立し、その接続が変化するたびに再生成される。

本論文の中心命題は、次の通りである。

> **現実を感じる、即ち、我生成す。**

この命題は、「我思う」を単純に「我感じる」へ置き換えるものではない。「感じる私」の主観的確信を新たな絶対的根拠にするならば、主体中心性は温存される。ここで問われるのは、感じる主体の確実性ではなく、自己の感じと現実感との接続から、自己がいかに生成するかである。

そのためには、以下の概念を明確に区別しなければならない。

- 自己根拠は、自己が生成する局所的な現実の根拠である。
- 世界性は、世界観を世界そのものと混同しないための開放性である。
- 作品性は、作品観を作品そのものと混同しないための開放性である。
- 言語デリバティブは、根拠から派生し、意味や制度を増幅する言語構造である。
- 即は、異なるものを差異のまま接続し、新たな位相を生成する契機である。
- 位相ロックは、派生した配置が根拠そのものとして固定される状態である。

2. 概念の全体構造

本論文の概念関係は、次の生成連鎖として整理できる。

> 共存在
> ↓
> 局所的な接続
> ↓
> 即
> ↓
> 自己根拠・世界性・作品性
> ↓
> 言語化・制度化・評価
> ↓
> 言語デリバティブ
> ↓
> 根拠の忘却と固定化
> ↓
> 位相ロック

ただし、自己根拠、世界性、作品性、言語デリバティブは同じ種類の概念ではない。

自己根拠は、自己と現実との接続から生じる局所的な生成の根拠である。世界性と作品性は、その根拠や対象を一つの見方に閉じないための開放性である。言語デリバティブは、根拠から派生して意味、価値、制度、未来可能性を増幅する媒介構造である。即は、これらの生成を可能にする接続の様式であり、位相ロックは、その接続と派生の流動性が失われた状態である。

したがって、これらを同列の「性質」として扱うことはできない。自己根拠とは、自己と現実との接続から自己が生成する局所的根拠であり、自己を自己像から区別する。自己根拠への接続が失われると、自己像が自己そのものとして作用する。

世界性とは、世界観を世界観として観る開放性であり、世界を単一の見方に閉じないための条件である。世界性が失われると、ある世界観が世界そのものへと転倒する。作品性とは、作品観を作品観として観る開放性であり、作品を制度や定義に閉じないための条件である。作品性が失われると、ある作品観が作品そのものとして絶対化される。

言語デリバティブとは、局所的根拠から派生し、意味、価値、制度、未来可能性を構成して流通させる言語構造である。その派生性が忘却されると、言語表象は生成根拠を隠しながら自律化する。即とは、差異を保ったまま異なるものを直接接続し、その接続から新たな位相を生成する契機である。即が失われると、接続は外部的な推論または固定された同一性へと還元される。

位相ロックとは、局所的根拠とそこから派生した配置が唯一の構造として固定された状態である。それは独立した根拠ではなく、生成の開放性が停止し、派生物が根拠の位置を占めた結果として生じる。

この区別によって、概念間の関係は次のように理解できる。

> 即が接続を成立させ、自己根拠・世界性・作品性が開放的な生成を支え、言語デリバティブがその生成を媒介・増幅する。
> しかし、派生の条件が忘却されると、言語デリバティブを含む派生物が根拠の位置を占め、位相ロックが生じる。

3. 方法論と理論的位置

本論文は、生成学を、存在、主体、対象、関係、意味、価値が、差異、接続、力、身体、環境、時間を通じて現実として生成、維持、変容する条件を研究する領域として位置づける。その基礎存在論が生成の位相存在論である。

方法上、三つの区別を設ける。

第一に、存在と存在についての表象を区別する。第二に、自己根拠と自己根拠から派生した自己像を区別する。第三に、現実と、言語、制度、評価によって構成された現実観を区別する。

これらは断絶した二項ではない。後者は前者から生成される。しかし、生成条件が忘却されると、派生物が根拠の位置を占める。この転倒を、本論文は「根拠の転倒」と呼ぶ。生成の最小構造は、次のように記述できる。

> $A \times B \to C$

CはAとBの単純な合成でも、一方による他方の包摂でもない。差異を保つAとBの接続から生成する、非対称的かつ還元不能な第三項である。

自己の感じをA、現実感をBとするならば、自己根拠Cは両者のいずれにも還元できない。

4. コギトの限界と自己以前性

コギトは、疑う行為そのものを思考の証拠とし、思考を自己存在の証拠とする。しかし、思考が開始される以前に、身体は呼吸し、重力を受け、環境に位置し、言語を継承し、他者から呼びかけられている。

ここでいう「以前」は、単なる時間的過去ではない。それは、現在の自己をいまなお生成している存在論的先行性である。

人間以前性とは、人間という概念、意味、制度、対象化に先行しながら、身体、物質、自然、環境、季節、成長、衰退、死として人間を生成し続ける一般的条件である。

自己以前性とは、社会的属性、評価、所属、職業、自己像として固定される以前に、個別具体的な感覚、方向性、判断、創造可能性として自己を生成し続ける条件である。

したがって、自己は自らの唯一の起源ではない。自己が「私は考える」と言える以前に、自己以外との関係が作動している。

コギトは誤っているのではない。それは、すでに生成した自己による二次的な自己確認である。生成的コギトは、その確認を可能にした前対象的、前反省的、共存在的条件へ遡る。

5. 自己根拠

5.1 自己根拠の定義

自己根拠とは、自己が自己を論理的に証明することではない。また、他者や制度によって承認された自己像でもない。

自己根拠とは、自己の感じと現実感との接続から、自己が自己として局所的に生成する出来事である。

> 自己の感じ × 現実感 → 自己根拠

自己根拠は、自己の内部にあらかじめ存在する本質ではない。それは、自己と自己以外との接続が、この自己において現実として感じられるときに生じる。

自己根拠の「自己」は、孤立した自我ではない。身体、他者、場所、記憶、文化、言語、時間がすでに働いている関係の局所である。

5.2 自己根拠と自己像の違い

自己像は、自己根拠から派生した表象である。自己像は、言語、記憶、評価、制度、他者の視線によって構成される。

自己像は必要である。自己像がなければ、自己を語り、記憶し、他者と関係し、社会的に行為することはできない。しかし、自己像が自己根拠との接続を失うと、自己像は自己そのものとして作用し始める。

この状態では、自己は現実との接続から生成するのではなく、流通する自己像に適合するように自らの感じを調整する。

6. 「即」と生成的コギト

6.1 「ゆえに」と「即」の違い

「ゆえに」は、前提から結論を導く論理的推論を示す。

> A、ゆえにB

これに対して「即」は、異なるものが差異を失わずに直接接続し、その接続から新しい位相が現成することを示す。

> A、即B

「即」は、AとBが同一であるという意味ではない。AとBが差異を保ったまま接続し、その接続自体が第三の生成を生むという意味である。

したがって、自己の感じが原因となり、後から自己存在が結論されるのではない。自己の感じと現実感が即するとき、その接続そのものとして自己が生成する。

6.2 即の定義

即とは、異なるものを同一化せず、外部から推論によって結びつけるのでもなく、差異を保持したまま直接接続し、その接続から新たな位相を生成する関係様式である。

即は、次の三つの特徴をもつ。

1. 差異を消去しない。
2. 接続を外部的な推論に還元しない。
3. 接続そのものから第三の生成を生む。

この意味で、即は概念の一つではあるが、他の概念と同じ対象を指すものではない。自己根拠、世界性、作品性、言語デリバティブは、即によって生成・接続・派生する構造である。

6.3 生成的コギト

> **自己の感じと現実感とが即するとき、共存在する現実は自己として局所化され、私は生成する。**

「我生成す」は、自己同一性の否定ではない。自己同一性を、固定的な出発点ではなく、異なる時間、関係、応答を通じて暫定的に維持される生成的成果として捉える。

7. 世界性

7.1 世界観と世界性

世界観とは、自己が世界を対象化し、一定の意味と秩序として構成した見方である。

世界性とは、特定の世界観ではない。世界性とは、複数の世界観が生成されうる開放性であり、世界が一つの見方に尽くされないための条件である。

したがって、世界観と世界性は区別されなければならない。

- 世界観は、世界についての特定の見方である。
- 世界性は、世界観を生成し、比較し、変容させる開放性である。

世界性が保たれているとき、世界観は世界を観る一つの仕方として自覚される。世界性が失われるとき、世界観は世界そのものになる。

7.2 世界性と自己根拠

自己根拠が、自己と現実との接続を局所的に成立させるのに対し、世界性は、その局所的な現実観を唯一の世界として固定しない。

自己根拠は「私はどのように現実において生成するか」を支える。世界性は「私が生成した現実観を、どのように世界そのものと混同せずに観るか」を支える。

したがって、自己根拠は生成の局所的根拠であり、世界性はその根拠から生じた世界観を開放する位相である。

8. 作品性

8.1 作品観と作品性

作品観とは、何を作品と認め、どのような意味と価値を与えるかという歴史的、制度的、個人的な見方である。

作品性とは、ある事物、行為、生活、場所、関係が、既成の作品概念に回収される以前に作品として生成し、作者の意図や所有を越えて関係を生成し続ける開放性である。

したがって、作品観と作品性は区別される。

- 作品観は、作品についての特定の見方である。
- 作品性は、作品観を生成し、変容させ、超える開放性である。

作品性が保たれているとき、作品観は作品を観る一つの仕方として自覚される。作品性が失われるとき、作品観は作品そのものの定義として絶対化される。

8.2 作品性と世界性

世界性と作品性は同一ではない。

世界性は、世界観を世界そのものと混同しないための開放性である。作品性は、作品観を作品そのものと混同しないための開放性である。

両者は対象を異にするが、構造は同型である。

> 世界性：世界観を世界そのものと混同しないための開放性
> 作品性：作品観を作品そのものと混同しないための開放性

世界性が世界の生成可能性を開くのに対し、作品性は作品の生成可能性を開く。

9. 自己根拠、世界性、作品性の同型構造

三者の関係は、次のように整理できる。

> 自己根拠が忘却されると、自己像が自己そのものになる。
> 世界性が失われると、世界観が世界そのものになる。
> 作品性が失われると、作品観が作品そのものになる。

ただし、三者は同じものではない。

- 自己根拠は、自己と現実との接続から生じる局所的な根拠である。
- 世界性は、世界観を開放する生成的な位相である。
- 作品性は、作品観を開放する生成的な位相である。

自己根拠が「自己の生成」を支えるのに対し、世界性と作品性は、それぞれ「世界の見方」と「作品の見方」を固定しないための条件である。

10. 言語デリバティブ

10.1 言語デリバティブの定義

言語デリバティブとは、既存事実を単に表象する言語ではなく、局所的な根拠から派生し、未実現の意味、関係、価値、未来可能性を現在へ投射し、増幅する言語構造である。言語デリバティブは、それ自体として虚偽ではない。言語は、現実にまだ存在しない可能性を構成し、共有し、実現へ向けて働かせる生成的能力をもつ。

言語デリバティブは、次のような連鎖を形成する。

> 局所的根拠
> ↓
> 名称
> ↓
> 概念
> ↓
> 言説
> ↓
> 評価・制度
> ↓
> 現実観

10.2 言語デリバティブと自己根拠

自己根拠は、自己と現実との接続から生じる。言語デリバティブは、その接続から派生した意味や表象を流通させる。

したがって、自己根拠と言語デリバティブは同じではない。

- 自己根拠は、自己と現実との接続そのものである。
- 言語デリバティブは、その接続から派生した言語的・制度的構造である。

言語デリバティブは自己根拠を表現し、共有し、拡張することができる。しかし、派生性が忘却されると、言語デリバティブは自己根拠を隠し、自己根拠の代わりに作用する。

10.3 言語デリバティブと世界性・作品性

言語デリバティブは、世界観や作品観を形成する。

> 自己根拠 → 言語デリバティブ → 世界観
> 自己根拠 → 言語デリバティブ → 作品観

世界性と作品性は、これらの言語的・制度的な派生物を、それ自体として絶対化しないための開放性である。

世界性があれば、世界観は一つの言語的構成として観られる。作品性があれば、作品観は一つの制度的・歴史的構成として観られる。

11. 位相ロック

11.1 位相ロックの定義

位相ロックとは、局所的な根拠とそこから生じた配置が、唯一の必然的構造として固定されることである。

位相ロックでは、派生物が自らの派生性を忘却し、根拠そのものとして作用する。

> 根拠 → 派生 → 固定化 → 根拠の忘却 → 位相ロック

位相ロックは、単なる心理的な思い込みではない。それは、自己、世界、作品、言語、制度、評価の関係が、別様に接続し直される可能性を失った状態である。

11.2 位相ロックと三つの転倒

位相ロックは、次の三つの転倒として現れる。

> 自己像が自己そのものになる。
> 世界観が世界そのものになる。
> 作品観が作品そのものになる。

このとき、自己根拠、世界性、作品性が失われる。

- 自己根拠の喪失は、自己像を自己そのものとして固定する。
- 世界性の喪失は、世界観を世界そのものとして固定する。
- 作品性の喪失は、作品観を作品そのものとして固定する。

言語デリバティブは、この固定化を増幅する。名称、概念、評価、制度が循環し、派生物が現実の見え方を規定するからである。

11.3 位相ロックとゆらぎ

自己根拠、世界性、作品性は、根拠のゆらぎと位相のゆらぎを保持する。

根拠のゆらぎとは、存在の根拠が自己完結せず、自己以外との接続によって更新され続けることである。

位相のゆらぎとは、その非完結性が、自己と他者、主体と対象、世界と世界観、作品と非作品の境界および接続関係の変化として現れることである。

ゆらぎは無根拠や無秩序を意味しない。それは、根拠と構造が存在しながら、終局的に閉じず、別の接続を受け入れうる構造的非閉包性である。

位相ロックは、この非閉包性が失われた状態である。

12. 共存在から単一の根拠へ

人間は、最初から一つの根拠のもとに存在しているのではない。身体、自然、他者、物質、場所、文化、言語、過去、未来、死など、複数の根拠が生成されうる共存在のなかにある。

より厳密には、人間が複数の根拠を所有するのではなく、それらの根拠が分節される以前の関係場に置かれている。

対象化は、この共存在から局所的な輪郭を取り出し、それを「何か」として確定する。対象化自体は否定されるべきではない。対象化がなければ、認識、言語、行為、制度、作品は成立しない。

問題は、対象化を可能にした局所的根拠が無自覚になり、その対象化が絶対的なものになることである。

この過程は次の連鎖として示される。

> 共存在 → 局所的根拠 → 即 → 対象化 → 言語化 → 世界観・作品観 → 現実観

本来、この現実観は共存在から生成した一つの局所的成果である。しかし生成経路が忘却されると、現実観は現実そのものとして作用し始める。

13. 生成的コギトと自己証明

生成的コギトは、自己証明を論理的同一性と外部承認の二者択一から解放する。

「私は私である」という命題は、証明すべき自己を前提とするため循環的である。他方、他者、制度、市場、評価、情報による承認は、自己そのものではなく、自己以外による自己の証明である。

第三の可能性は、自己と自己以外との具体的な相互作用が、時間を経て還元不能な応答として帰還し、その応答への気づきによって自己が自己として現前することである。

ここで自己は、自己以外によって一方的に規定されるのでも、自己だけで自足するのでもない。自己と自己以外との接続が現実を生成し、その現実が自己へ応答する。

この構造において、「感じる」は認識より劣った曖昧な作用ではない。それは、対象化と概念化に先立ち、自己が現実によって動かされていることを受け取る能力である。

ただし、その感じは誤りえない私的真理ではない。感じは自己以外との接続に開かれ、応答、時間、実践、他者によって修正される。この開放性によって、生成的コギトは主観主義と独我論を回避する。

14. 芸術と生成的コギト

芸術は、生成的コギトを説明する図解ではない。芸術は、自己の感じと現実感が再接続されうる条件を構成する実践である。

芸術は、固定された作品観に適合する対象を制作するだけでなく、何が作品であり、何が現実であり、誰が自己であるかを支えていた根拠を揺らす。

作品性とは、作品が作者の自己表現へ閉じず、自己以外が到来し、異なる応答を生成できる「席」を残すことである。作品は完成した意味の容器ではなく、自己と自己以外との境界を可動化するインターフェイスとなる。

この意味で、芸術が生む根拠のゆらぎは、破壊そのものを目的としない。それは閉じた必然性を偶然的接続へ開き、その接続から個別具体的な必然性を再生成する力である。

Web Installationは、作品を固定的対象ではなく、画面、通信、身体、場所、閲覧者のアクセスによってその都度生成する。

民宿狭山美学校は、生活、宿泊、教育、制作、地域、訪問者を接続し、「あちら」と「こちら」の境界を生成する現実ディスプレイとして働く。

これらの実践では、作品は現実から切り離された表象ではない。作品は、自己と現実との接続を感じ直し、作品観を作品性へ開き、位相ロックを解除するためのインターフェイスである。

15. 考察

生成的コギトの理論的意義は、第一に、自己の存在を確実性ではなく生成から捉える点にある。自己は証明によって初めて存在するのではない。自己は共存在する現実との接続においてすでに生成しており、感じとはその生成への前対象的な気づきである。

第二に、この命題は感覚を思考より上位に置くものではない。思考も言語も、自己と現実との接続から生成する重要な位相である。問題は、それらが派生物であることを忘れ、生成根拠そのものを代替することである。

したがって課題は、思考を捨てて感じへ戻ることではなく、思考と言語を現実接地へ再接続することである。

第三に、生成的コギトは多元主義と相対主義を区別する。複数の根拠と世界観が生成しうるからといって、すべてが同じ妥当性をもつわけではない。

妥当性は、抽象的な絶対基準だけでなく、身体、他者、環境、時間、実践からの応答を引き受け、接続を更新できるかによって検討される。

世界性とは判断を停止することではなく、判断の根拠を閉じないことである。作品性もまた、作品について何も判断しないことではなく、作品観を唯一の定義として固定しないことである。

第四に、生成的コギトは現代の空虚感を、内面の欠如だけではなく、自己確認を担う位相の単一化として理解する。

評価、数値、可視性、所属、資本、情報が自己確認を独占するとき、身体、場所、物質、他者、時間からの応答が感じられなくなる。自己像は鮮明になる一方で、自己根拠への感覚は薄れる。

自己の喪失とは、自己像の欠如ではない。自己像を自己像として観るための自己根拠との接続の喪失である。

16. 結論

本論文は、デカルトのコギトに対し、「現実を感じる、即ち、我生成す」という生成的コギトを提示した。

この命題は、感じる主体を新たな絶対的根拠にするものではない。自己の感じと現実感との「即」によって、共存在する現実が自己として局所化し、自己が生成することを示す命題である。

自己根拠は、自己についての対象的知識ではない。それは、自己と現実との接続が自己において感じられる出来事である。

世界性は、世界観を世界そのものと混同しないための開放性である。作品性は、作品観を作品そのものと混同しないための開放性である。言語デリバティブは、局所的な根拠から派生し、意味、価値、制度、未来可能性を増幅する言語構造である。

即は、これらの生成を可能にする接続の様式である。位相ロックは、派生した配置が根拠そのものとして固定され、自己像、世界観、作品観がそれぞれ自己、世界、作品へと転倒する状態である。

関係を最終的にまとめれば、次のようになる。

> 即が、異なるものを差異のまま接続する。
> その接続から、自己根拠が自己を局所化する。
> 世界性が、世界観を世界そのものから開く。
> 作品性が、作品観を作品そのものから開く。
> 言語デリバティブが、根拠から派生した意味と制度を増幅する。
> 派生性が忘却されると、位相ロックが生じる。

現代の言語デリバティブ空間は、この転倒を増幅する。局所的根拠から派生した言語表象が、自らの生成条件を隠しながら増殖し、現実観を現実そのものとして構成する。

これに対し芸術は、別の絶対的世界観を提示するのではなく、根拠と位相のゆらぎを回復させ、自己と現実との接続を再生成する。

ゆえに、生成的コギトの最終的な意味は、自己の確実性を宣言することではない。それは、自己が自己以外と共にあり、その接続を感じるたびに自己として生成するという、存在の構造的非閉包性を引き受けることである。

> **現実を感じる、即ち、我生成す。**

参考文献

Descartes, Rene. Discourse on Method. 1637.
• Descartes, Rene. Meditations on First Philosophy. 1641.
• Heidegger, Martin. Being and Time. 1927.
• Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception. 1945.
• Nishida, Kitaro. An Inquiry into the Good. 1911.
• Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Axioms of Generative Topological Ontology: Foundations of Generative Being. Research Monograph Series, Version 1.0, 2026.
• Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Pre-Humanity and Pre-Self: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0, 2026.
• Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and the Leverage Structure of Artificial Intelligence Hallucination. Research Monograph Series, Version 1.0, 2026.
• Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Mark as Wound and the Critical Point of Self-Objectification. 2026.
• Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Generative Theory of Co-Being. 2026.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。